

LLA シニア会通信

Oct. 30, 2011

祝賀会での祝辞の主旨

丹羽 義信

(1)五十周年記念祝賀会で述べたかったことを繰り返します。与えられた時間が短かったので十分意を伝えることができたか不安でしたので多少付加して述べます。短い時間でしたが、あとで何人かの人から感想をいただき、皆さんも同じことを考えていらっしやると心強く思いました。

LETの前身であるLLAがどんな貢献をしたか、思い出してみます。今、学会名も変わり若い人はLLAといってもピンこない人が多くなりつつあるときLLAがどんなに意義あるものを取り入れたかを述べてみます。

(2)第1に音声を取り入れたことです。それまで英語教育は **grammar-translation method** 一点張りでした。**grammar-translation method** は文字と意味のみで可能で、音声中心の方法を取り入れることは不可能でした。社会情勢の要求があったとはいえ、LLAがなかったらあんなに見事に変身することは出来なかったと思います。**English 900** や **Deutsche 2000** などのテキストの普及ぶりをみればその貢献は驚くべきものがあります。

(3)第2に構造言語学という理論をとりこんだことです。理論にしっかり結びついた教育方法は力があります。**audio-lingual method** として今も残って世界各地で用いられています。

(4)第3に機器の活用を初めて取り入れた。機器の活用は「反復」などの省力化に大きく貢献しました。どの大学でも語学の教師は時間数が多く、疲労こんぱいです。「反復」の余裕はほとんどありません。狭い教室に大勢の学生が入って文法と解釈の討論を繰り返してきた授業はLL教室の出現で一新しました。

(5)最後に最も大切なことは文部省の援助をとりつけたことです。詳しい内容は知りませんが、文部省はLLAを高く評価していたようです。その証拠にFLEAT I国際大会では多額の援助があり、私が担当したFLEAT IIでも非常に好意的で多額の援助がありました。FLEAT Iでは私は文部大臣と会いました。大切なことは英語教育の改革には行政の長を味方に取り入れるということです。せっかく立派な研究発表がなされても行政の力がないと実現が難しいようです。韓国大統領は先頭に立って英語教育の旗を振っています。

(6)実は名古屋大学で今それが起こっているのです。医学部所属の濱口名古屋大学総長が英語教育の旗振りになったのです。今年の名誉教授の会に行き、並々ならぬ総長の英語教育の決意を聞きました。

(7)FACE (Academic Communication in English)というcompact discも作られそれを使って学部2年生全員(約2000人)が挑戦しています。プレゼンテーションを最終目的にしているようですが、音声とかなりの量の「反復」を課せられる仕組みになっています。まさにLLAの蒔いた種が実を結んでいます。このような試みは私が名大に在任当時から何度も試みましたが、とうてい全学的改革にはなりません。ところが総長がやる気になるとあっという間に実現しそうです。

(8)行政との橋渡しは学会がやるべきです。LLAの過去を想起すべきです。日本のように次々文部大臣が変わる国家ではなおさらです。テレビでも連日のように英語の必要性和日本人の英語力不足を訴えています。この現実に対し無言で静観する大臣や学会の現実は情けないと思いませんか。

(9)なおaudio-lingual methodに対する批判も当然あります。私も今、自称生成文法学者として生得的言語能力を主張する立場にありますが、音声と「反復」を欠かすことはできません。

後に継ぐことば

金田正也

当初、往年の意気込みは大きく、大勢の方々が長い間努力して来られ、大金が投入されて来たにもかかわらず、メディアや世相の急展開に我々の歩みには昨今必ずしもうまく同期がとれてない面がありそうです。何がそうなのか、我々の主張は何であったのか、50周年を機に系統立てて考察の要を感じます。時代は流れ・変わるのは当然ですが、現役諸君の活動の妨げにならないように留意しつつこれを振り返ることは、シニア会に残された大きな使命のようにも思われます。項目として取り上げたい切り口はいろいろ考えられます。たとえば、

(1)メディア利用のフィロソフィーは何であったか。単に教材・教具論を越えた視点があるはずですが。ただし、これを言い出すと英語教育全般に渉る多岐のスレッドに迷い込む可能性があり、よほど整理して取り組む必要がありますが、この土台造りをどう考えればよかったですでしょうか。堅固な土台の上にごそ堅固な楼閣は発展します。

(2)効果の検証・立論が不十分でした。「効果」のないことに大金や手間暇かける余裕のないのは当然です。〇〇を使った群と非使用群とを比較して、学期末に〇点の有意差があったとする効果形式論のみに期待し過ぎではなかったでしょうか。これも勿論正道ですが、「効果」の意味自体の捉え方に、まだまだ多くの面があることに気付くべきでした。それに向かったの工夫と実践の余地が多くあったのではないのでしょうか。

(3)学会である以上アカデミズムの追及は不可欠ですが、LETにはもう一つLLAの原点に返った活動が求められます。それは仲間同士のプラクティカルな技法・着想・情報・教材などの流通です。近年の大会に応募セミナーやパネルとして多彩な企画を見るのは我が意を得たりの慶事です。一般的に学術著書による成果の公開は「業績」に数えられますが、「メディア」は紙に即さない面が多々あります。優秀なセミナーの公開提供奉仕には何らかの意味で「著書」に準じる認知方法なり扱い方の模索・奨励ができないのでしょうか。

(4)有形の道具やその扱いに目を引かれる度合いの割に、それに乗る教材の諸相、さらには教材を織りなすカリキュラム論が追いついてなかった反省があります。既成の教材は多く紙媒体に依存した構成であり、それぞれ著作権があり、加工が自由ではありませんでした。かと言って、メディアを総合した体系的な新教材の生産は余りにも規模負担が大きく少数個人の取り組みの域を超えていました。学会として組織的・体系的に取り組む旗を振る努力の足りなかったのが心残りです。

(5)著作権の尊重も不可欠ですが、もう一つ、知らないうちに LET には特許権対策という大きな問題が生じてきています。コロンブスの卵ではないですが、こんなことまで、と思うほど教材作成技法・指導技法が登録されて、後続一般の手も足も出なくなりつつあります。ネットの特許電子図書館(特許庁)で簡単に状況把握できるようになりました。権利の主張の厳しい世相では、これら登録者の中には半ば自己防衛的に大金を負担しての登録の場合も起きているように仄聞します。至急手を打たないと自ら首を絞めあい、この途を阻害する大変なことになりそうです。LET にはできる対策があるのですが、これも残りました。

以上、やがては順番にシニアになられる現役の方々にも感謝の言葉に代えて贈ります。

LLA と LET の同志に感謝

池 浦 貞 彦

(1) この度は「外国語教育メディア学会創立50周年記念大会」においてご鄭重な表彰状をいただき、恐縮しながらも感激一入でございます。金田正也先生は出席されて久しぶりの再会を楽しみましたが、鈴木博先生と河野守夫先生は体調不全のためお出でになれなかったのが残念で、一日も早いご快復をお祈り致します。

(2) LLA そして LET 学会の一員としての50年間を振り返ってみますと、英語教師として歩き始めて間もなく「僕の下手な英語を真似させるだけで良いのだろうか？」または「50人も一斉に発音させた

のでは、誰が正しいのか？誰がどのように間違っているのか？判断できないまま“Very good!”で済ませていいのだろうか？」不安は募るばかりでした。

(3) その時運良くフルブライト基金による米国留学の機会を与えられました。1958年8月6日に横浜港から *President Wilson* 号に乗って太平洋を渡りました。今回宿泊した横浜グランド・インターコンチネンタル・ホテルは港の直ぐ横で10階にある私の部屋からは出入りする船が真下に見えて、52年前の感激を昨日のこのように想い出させてくれました。船室は8人が同室で、皆同じような夢を抱いているせいか直ぐに仲良くなりお喋りも絶える間が無く、中でも金田正也先生とは英語教育、わけても LL 教育の話になると胸が躍りました。

(4) 8月末から3週間ワシントン DC で文部省のオリエンテーションを受けたのですが、その間 *The North Star* という間貸し屋に住み、幸運にも金田正也先生と同じ部屋で過ごすことになり、「ランゲージ・ラボラトリー」という設備を詳しく説明して頂いたのが金田先生でした。見学に出かけた *American University* で「LL 教室における英語の授業」を参観した時には「これこそ僕の学校に設置すべきだ！」と強く感じました。

幸い留学先のミシガン大学では「外国語としての英語教育」の第一人者 *Charles C. Fries* 教授や *Phonemics* の理論を開発され *Kenneth L. Pike* 教授から直接指導を受けました。

(5) 大きな夢を担いで帰国しましたが、周囲に相談できる方がなかなか見つからず、週末になると金田先生や河野先生達が数名集まって開いておられた神戸の研修会に度々出かけて、目から鱗が落ちる思いをしました。

(6) 構造言語学に基盤を置いた英語教材に不満を覚えていた頃、英国大使館文化部に英国留学のための奨学金制度があることを教えてくださったのも同志の島岡丘先生でした。早速受験してエジンバラ大

学で“Notional-Functional Syllabus”を学ぶことができました。話せば切りも限りも無いのですが、詳しい内容は LET 学会創立50周年記念誌に書いておりますので、それで補っていただければ幸いです。

最後に「感謝状は、私を今まで育ててくださったこの素晴らしい LET 学会同志の皆さんに私からお贈りすべきものです」と申し上げて、お礼のことばに代えさせていただきます。

人ができること・機械ができること

羽鳥 博愛

(1) 翻訳機械は最近だいぶ進歩したようでも、よく使っている人の話によると、出てくる訳文には手を加えないと自然な日本語にはならないそうであるが、スピードがとても速い、それで彼は活用しているとのことであった。私はだいぶ前、東京理科大学の小保内虎夫先生が主催していた翻訳機械の研究会に参加していたが、そのころ考えていたこととは格段の違いがあるようなので感銘深い。スピードが速いというのは大変なことである。10 ページや 20 ページのものならわれわれもやる気になるが、100 ページ以上もある書類を短期間に訳さなくてはならないとなるとお手上げであるが、機械が荒訳をしてくれるなら大変に役立つ。

(2) 冷蔵庫は出荷する前に扉の開閉を機械で何万回もやるのだそうであるが、これは機械でなくては到底だめである。人間は同じことを何万回もやってはいられない。研究会をどこかの学校でやっているとき、途中でベルが鳴ってうるさいと思うことがある。それは一定の時間にベルが鳴るように設定してあると、いつもとは日程が違うのに機械はいつもの時間にベルを鳴らすのである。この場合には、この日に人間が設定を解除しておかなければならない。

(3) 以上の例でも分かるであろうが、機械は人間がとてもできなと

思うことを簡単にやってくれるが、臨機応変のことができない。最近大きな会社では電話の受付を機械でやっているところが少なくない。注文は①を、問い合わせは②を、さらに問い合わせの内容によって③や④を押すようになっている。非常に受付件数が多いところでは、このやり方が便利なのであろう。しかし、電話をかけたほうにすると、人が応答してくれないとなんとなく不安だし、いくつもボタンを押すのは案外時間がかかる。

(4) 英語の授業で言うと、音読練習をさせるときテープレコーダーを使って私は大変助かっている。テープなしだと私が読んで、後について読ませるのだが、3, 4回になるとくたびれる。テープは疲れないうで何回も読んでくれるのでありがたい。でもテープだけに任せていると、生徒の読み方がだれるので、どこを強く読む、どこで息をつくかなど随時言ってやる必要がある。英問英答は教師だと、生徒がすぐに答えられないと、出来るまで待ってやる、しかし、元来答はすぐ出ないとならないのでテープのほうがよいのかもしれない。

結局、人間が機械をうまく使いこなす工夫をするということになるようである。

近 況 報 告

松田 洋一

去る5月に「LLA シニア会」のご案内を頂き有難うございました。また、会参加者の写真まで頂き、重ねて御礼を申し上げます。当日は、講師として勤めております高校の行事のために参加できずに失礼いたしました。13名の先生方が元気に写真に写っておられ、楽しい歓談であつたらうと拝察いたしております。

(1) 定年退職して15年経ちました。その間、私立高校(日大山形高校)に8年準講師、公立高校(山形工業高校)非常勤講師5年、常勤

勤講師約2年（山形市立商業高校、県立寒河江高校）と勤務いたしました。現在は、頼まれて塾で週三夜教えております。さらに、習いものとして、English Songs、Voice Training (acappella) Magic など2週に1回程度、文化センターなどに通っております。

（2）おまけとして15年間も教職に付けたのは、LLを使った授業をした時に、前もって作ったテープ教材のお陰だと思っております。LLは使いませんでした。テープ教材を紙に代えて使用してきたわけです。そのメリットとしては、①授業の要点を生徒に提示して、その学習の定着が効率的になされること、②全員の生徒を参加させることが出来こと、③辞書を引くことのスピード化と語彙力の強化により、英語が分かるようになったという意識を自然に生徒に与えることが出来ること、④教室が静かで非常に教えやすく、1日3コマ以上持っても平気であること、⑤今まで英語が出来なくて嫌いであった生徒が興味を持ち、好きになり、自主的に勉強する生徒が増えてきたこと、等があって、教えてきて良かったという気分になっています。

（3）常勤講師としての2年間は、病気の先生の代行ですから、現役の先生とほぼ同じことをしなければならず、2年前73歳過ぎの小生には、体力的にも、能（脳）力的にも、（60歳台のふりをして）挑戦するつもりで勤務してきました。なにしろ、野球の野村監督とほぼ同じ世代ですから、生徒の英語再生工場（学校）の立場でやってみようと考えました。そして次のことを実践しました。

- ① 英語教師半世紀の+3年の経験を生かす。
- ② 生徒との **communication** を重視して、良い点を見つけて褒める。
- ③ 全員参加させるために工夫した授業を行う。
- ④ 特にできの悪い生徒がついていけるような教材の研究をする。
- ⑤ 生徒との阿吽（あうん）の呼吸を作り、人間関係を良くする。

（4）その他には、センター試験で高得点が取れる対策と、英語教育の古典的な良い教授方法と現代教授法のミックスで、現今の高校生に“受ける”ように配慮をしました。その結果、2学年3クラスの中で、

2学期の期末テストが、中間テストよりも30点以上UPした生徒15名、20点以上UPした生徒20名以上が出ました。言葉一つでこんなにもなるのかと、自分でもびっくりしております。

(5) 公立学校の教師は、民間の学校や他業種の世界から学ぶものがたくさんあります。小生も定年後、非常勤講師の時代に、民間の教育経営に携わったことがあり、生きるか死ぬかの瀬戸際を経験したことが、最後の2年間の非常勤講師のときに生かされた部分があったと思います。最後は、手前味噌的になり失礼しました。すばらしい先生方ばかりですから、次回はいろいろ経験談を聞かせて頂けるものと楽しみにしております。

英語と映像の狭間にて（その2）

宇佐美 昇三

(1) 映像を言語と考えてそれが子どもに理解されるかという実験は失敗に終わった。

東映教育映画製作の映画「お迎え狸」は1時間足らずの山の分教場の物語で、主人公の教師が山道で狸に化かされる夢を見るほんのりした物語だ。これを小学校の低学年、中学年、高学年に見せて、事後アンケートで、「これこれのシーンは、夢を見ていた、思い出していた、本当に起きたことだ」などと多肢選択で尋ねた。結果は、ほぼ全員が正解して、テレビ視聴歴も映画鑑賞歴も国語の成績も調べておいたが、全く論文にならなかった。ありものの子供向け映画は、子供向けにわかりやすく演出されているのだから、当然といえば当然だった。

(2) また、視聴中に子供同士が教えあい、事後アンケートでは、どのシーンを想起して答えるべきか、わからない児童がいた。「実験とは単純でない」ことを知らされた。この経験から米国のNYUに留学

したとき、児童映画「ペギーとピエール」を製作した。この映画を用いてA A C型語学ラボラトリーの録音機能を使い、被験者に映画視聴中に質問してリアルタイムで彼等の反応を記録する技法を開発した。

修士論文が行き詰まった1959年にNHK教育テレビが始まり、私は秋の臨時入社試験になんとか受かった。が、国際局という短波で海外に放送する報道部に配置され、テレビ局に変わったのは5年後（途中、留学1年を含む）だった。その間、音声だけで世界中に情報を伝達する番組制作の経験、その中身もケネディ暗殺や日米安全保障条約反対をめぐる大規模なデモなど印象に残る。

(3) テレビに変わったが、同時にラジオ番組も担当した。NHK第2放送は「基礎英語」と松本亨先生の「英語会話」だけだった。基礎英語は英国式英語でオーラルメソッド、松本先生は米国式英語で「後について言いなさい」方式で、両者の橋渡しする番組が求められていた。1000人近い英語教師をリストアップして聞き込み、オーディションで2人に絞り込んだ。それが「基礎英語」三井平六先生、「続基礎英語」安田一郎先生で、それぞれミシガン大学でオーラル・アプローチを学んでこられた先生だった。当然、米国式英語で「英語会話」への橋渡しができることになった。

(4) 当時はパタンプラクティスの全盛期で、私は空を飛ばしし教室という意気込みで「続基礎英語」を担当した。平行して担当したテレビ『英語会話中級』は、まだ、確かな教授理論や方法が無く、試行錯誤を重ねた。「英語会話初級」は「挨拶」「買い物」など定型がある。中級・上級になればドラマに見るようなスピード、多様な語彙、裏の意味などが現れる。しかし、中級の英語会話とはどのようにシラバスを組めばいいのだろう。担当者は、班会などで議論を重ね、初級は学習者に声を出させる、中級は学習者に英語音を聞かせる、という棲み分けをすることになった。

(5) テレビを担当して、映像を持つということが、利点である一方、学習者の注意を英語音声や解説からそらすのではないか、という不安が付きまとった。語彙を視覚化できるといっても、抽象名詞は絵にし

にくい。「平和」といえば「鳩の絵」のように、比較的対応のあるものは、さておき「命令形」「否定形」は絵で簡単に描けない。物質名詞は、カウンターといって「コップいっぱいの水」「トラック 1 台分の砂」のように英語やフランス語では、分量を限定する語句があるため、「水」だけを描くのにアニメーションでホースからほとばしる水で宙に「eau」と描いたこともあった。「笑う」という動詞も絵にすると「猫が笑う」のように主語を伴う。

(6) 正月を表すつもり「松の写真」は熱海の松という特定の場所の松であり、枝ぶりや、松喰虫の害など見る人に様々な連想と反応を引き起こす。漢字の「松」であれば、読者が想起する心像の松で、そこから「めでたさ」や「植物」という縦の抽象の階段を発生する。

具体的な写真でもう一つ厄介なのは主映像は「背景」を伴うということだった。ワゴン車を説明する写真を探してくると、背景にマクドナルドの看板がある。蟻を説明する写真では地面の凹凸の影がつよく見えて、静止画では、肝心の蟻が見えない。指し棒で指すか、カメラに蟻をズームアップしてもらって、ようやく、そこに蟻がいるとわかる。映画であると蟻が動くので、モノクロの画面でもすぐ蟻を認識できる。

映像における被写体の「動き」、またはカメラの「動き」が注視を誘う効果があることを実感した。(終り)

そして今

石川 達朗

(1) LLA・LET では、この 50 年、TELL (Technology Enhanced Language Learning) の人間性を問い、科学している。会員の研究・制作・実践の分野が広範囲に亘ることも利点である。支部研究会で述べられた高校の先生の意見を認め、次年度の入試が改善されたことも

あった。いろいろな教育機関や企業に所属する人が叡智を出し合って、TELLの改善に取り組んできた。

教え子たちが海外でも第一線で命をかけて、日本のため、人類のためにことばを駆使して働いている。

(2) 最近、「研究者が英語で科学論文を書くことができない」「専門家による誤訳が多い」ということばをよく耳にする。「裁判員制度による裁判の同時通訳で6割が誤訳」「契約書の語訳によって多大の損失を負わされた」などの声もある。

高等教育機関や専門学校における語学環境を整備するために高等学校における英語の学習環境を再考することが急務。

(3) 高1から1年半意兄に辞書を引かずに楽しく洋書900頁読破。高1から英々辞典を読み、**definition**の記述から解釈の補助線を悟る。同意語・反意語・派生語を学び、**paraphrasing**の力や**covert meaning**を把握する力を育む。辞書を片手に、涙しながら、じっくり読むことも忘れまい。精読教材の精選も肝要である。

(4) 我々ひとり一人が方言を話している。どの方言も尊重する。相手の文化(**personality, intelligence, appearance, voice**なども)から相手の**utterance**の**style sheet [blue print]**を予想して、有効情報点の位置を的確に予測し、情報に的確に対応する力を構築、拡張することが肝要である。

(5) 交渉の場では、“**I think you said so and so. Am I right?**”と言って、相手の言い分を充分理解したことを示す。相手の使った**chunks**を巧みに操り、**summary**を上手に纏めること。

説得の場での“**I believe A leads to B. What do you think?**”では、**precis writing**と同じで、自分の語彙の中で、相手が理解するものを使う。自分の発話を**expand**して、**the client**が“**That’s interesting!**”と言った時点で、聴く、話すは終わる。その後のやり取りは、**e-mail**を読み、**e-mail**を書くことになる。高校時代から、与えられたり、自分

で選んだりした書物・論文等についてレポートを書く体験・習慣を育むことである。

テレビ報道で思い出す支部研究会

浅 野 博

(1) 去る8月(2010年)のテレビ番組で、福島県立会津大学と秋田県立国際教養大学のことを報じていました。いずれも教員に外国人が多く、英語以外の授業も英語で行われる科目が多いといった特徴があるようでした。秋田のほうは、国際教養という観点から国際ビジネスに携わる人材の養成が主目標であり、会津のほうは、最先端の技術を駆使するエンジニアの養成を目指しているとのことでした。(詳しくは、各大学のホームページをご覧ください。)

(2) 会津大学は、昭和年60年代の終わりの頃、LLA 関東支部の研究大会の会場として借用したことがありました(森田事務局長にお世話になりました)。参観した英語の授業は、日本人の女性の先生でしたが、ヘッドセットから聞こえてくる英文を真似して言うと、オシログラフのような図形が画面に現れて、モデルのものと比べると、その違いが分かるというものでした。私は普通のLLのほうが、学生に分かりやすいのではないかと思いました。

(3) 話し言葉によるコミュニケーションには、音声が大事なことは当然ですが、外国語学習では理屈や分析よりも、多くの事例に触れることが大切なのだと思います。学習における“機器”はあくまでも「手段」であって、「目的」ではありません。これからの学会活動においても、この基本をおろそかにしないで、外国語教育の実をあげてもらいたいものと考えています。

落合二郎という人

大八木廣人

1997年度の授業開始の日に「落合先生が腰を悪くされて、本日は休講だそうです」という報告を拓大の LL 助手から受けたことがあります。落合さんは都立府中東高校に長年奉職された後、聖徳大学附属聖徳中学・高校、聖徳短大などを経て、拓殖大学工学部の非常勤講師を引き受けていただいていたいました。数日後こちらから電話をしてみると、ぎっくり腰になってしまって、どうにも動きがとれないと明るい返事が返ってきました。数日中にでも回復して、にこにこしながら「いやー、どうもどうも！」とお元気な顔を見せてくださるものと私も軽く考えていました。ところが、その痛みはますます激しくなり、精密検査を要するというので、入院されたのでした。

國吉先生と一緒にお見舞いに行くと、「白血病だそうです。血液の癌ですよ」と、例の笑みをたたえながらさらりと言われて、私はぎくっとしていました。その後一時快復の兆しがあったようですが、12月20日に呆気なく永眠されました。丁度その日は土曜日で、3時から LET 関東支部の運営委員会が、6時から忘年会が開催される日だったのです。息を引き取られた時刻が夕方の5時20分だったと聞いて驚いたのは、まさに運営委員会が終了した時刻だったからです。運営委員会には欠かさず出席しておられた落合さんの気概のなせる技か、私は運命的なものを感じました。

落合さんが LLA に入会されたのは非常に古いと思います。1970年頃の LLA 関東支部研究会の折、研究社の「現代英語教育」に私が書いた拙文に朱線を引いて、質問に来られたことがあります。熱心な方だと感心したことを思い出します。その後、運営委員になられると存在感のある働きをされますが、1992年の役員改選で浅野博先生が関東支部支部長になられると、落合さんは副支部長に推薦されました。宇佐美さんと私も一緒でした。1994年に羽鳥先生が会長に就任されると、本部付き広報(Newsletter)担当として活躍されます。特に、IALL(現在の IALLT)との共催で1997年に開催された世界大会 FLEAT IIIで

は、持ち前の英語力とテクニックを発揮して、大会開催前の1996年夏に会場のカナダのビクトリア大学を訪問し、IALLの多くの役員たちと懇親を深められたようです。ところが肝心の本大会には参加できなかったのです。なんとも残念なことだったかと今更思うことです。

最後に、落合さんのご逝去を悼んで書かれた羽鳥先生と、ビクトリア大学の Dr. Peter Riddell の追悼文の一部を引用します。

FLEAT IIIは多くの人の協力のおかげで大成功でしたが、その陰には落合さんの広報活動があったのです。…落合さんはアメリカやカナダへ送った英文の控えを私のところへファックスで送って見せてくれたのですが、その英文はなかなかうまく、ところどころにユーモラスな部分があったりして、私は改めて彼の文才に目を開かされる思いでした。(羽鳥)

Jiro Ochiai will remain in my mind as the hard-working editor and cheerful ambassador for LLA who helped to build the bridges which made possible FLEAT III in Victoria. He was, to our deep regret, too ill to come to the conference himself, although he dearly wanted to. It would be nice to think that he was there in spirit, supporting the international cooperation that he helped to create between LLA, IALL and us here in Victoria. (Peter)

編集後記 (*By Asano*)

(1) 原稿を募集してから1年以上も経過してしまいました。これは引き受けました浅野の責任で、深くお詫び申し上げます。言い分けを言わせて頂くと、ちょうどパソコンの機種が変更になった時期で、私も古い Windows から、Vista や Window 7 へと渡り歩いておりました。慣れていないものですから、インターネットで送られた原稿は、全く編集がきかず、フォントや位置の変更ができませんでした。そのため、手書き原稿と同じように、すべて入力し直しましたので、ミス

プリがあるかと思えます。お気づきの点はお知らせください。

(2) 版の大きさは、プリントアウトして郵送する必要があることから、B5にしました。また、読みやすくするために、勝手に章に分けましたこともお断りいたします。

判読できません場合は、プリントアウトしたものをお送りしますので、浅野のメールへお知らせください。

(asa-8223-hiro@aqua.plala.or.jp)

2011年10月30日 浅野 博



2010年3月23日アルカディア市ヶ谷(私学会館)で開催された第4回「LLA シニア会」参加者(敬称略)

前列左から、羽鳥博愛、大井上 滋、丹羽義信、浅野 博、國吉丈夫、石川達朗

後列左から、石丸玲子、鈴木 博(故人)、金田正也、宇佐美昇三、戸川良弘、佐藤 仁、大八木廣人

